古代アメリカ学会会報

第 23 号

アンデスのテンジクネズミ（クイ）

目次

◆会員からの投稿..... 1
◆『古代アメリカ』の原稿募集..... 7
◆役員会報告..... 7
◆第 12 回総会報告..... 8
◆第 12 回研究大会..... 10
◆会計報告..... 11
◆新入会員..... 12
◆事務局からのお知らせ..... 12
◆次回研究大会について..... 13
◆役員選挙のお知らせ..... 13

2008 年 2 月

＊本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

ネサワルコヨトルは「詩人王」か？—メキシコ中央部の先住民記録文書の批判的再検討—

井上幸孝（立命館大学 言語教育センター）

1

学部生の頃、ゼミの授業で『ラミーレス文書（*Códice Ramírez*）』に出会った。正確には、同文書に付属する「付篇 2（fragmento 2）」を読んだのだが、この史料はメシーカ人ではなくテスココ人、それもコルテスのメシコ征服に加担したエルナンド・イシュトリルショチトル（テスココ王ネサワルピリの息子の一人）に近い立場に与する征服史の記述であり、それまでに筆者がイメージしていたアステカ征服史とはまったく違っていた。そして、当時の指導教授から勧められた M・レオン＝ポルティージャ『敗者の視点』、G・ボド／T・トドロフ『アステカ人の征服物語』といった代表的アンソロジー（後にそれぞれ『アステカの挽歌』、『アステカ帝国滅亡記』というタイトルで邦訳された）を入口として、メキシコ中央部の史料を読むことに魅かれていった。結果、アルバ・イシュトリルショチトル（以下、イシュトリルショチトル）、チマルパイン・クァウトレワニツィン（以下、チマルパイン）、アルバラード・テソソモク（以下、テソソモク）らが 16 世紀後半～17 世紀前半に書いたメキシコ中央部のいわゆる「先住民記録文書（crónicas indígenas）」の分析を進めてきた。

2

本稿の主題はそうした記録文書の再検討に関わるものである。上述の各記録者が書き残したものや、サアグンが編んだ『フィレンツェ文書』には、紛れもなく後古典期後期のメキシコ盆地およびその近隣地域に関する貴重な情報がふんだんに含まれている。それゆえ、考古学的資料にほぼ全面的に依存する先古典期や古典期の研究に比べ、後古典期研究のための情報は質量ともに大きく異なる。とはいえ、それら文書史料の情報をどう選び取って使用するかは、私たち現代研究者の判断に委ねられている。

スペイン人が書いた記録文書に当時のスペイン人独自の視点が含まれていることは想像に難くない。とりわけ、T・トドロフ『他者の記号学』を契機とする他者認識にまつわる一連の議論のおかげで、こうした点が明らかにされてきた。スペイン人記録者たちは、キリスト教徒としての観点から征服以前の宗教を「悪魔の仕業」と見なして厳しい価値判断を下した。しかし、先住民記録者が書き残した情報となると、これを「真正な先住民情報」として鵜呑みにしがちで、疑ってかかる研究者の数は格段に少なくなる。

図 1 壁画に描かれた記録者アルバラード・テソソモク（アスカポツァルコ区文化会館、筆者撮影） ©井上幸孝

図 1 は 17 世紀頃の絵文書に基づいてテソソモクを描いた現代の壁画である。その風貌は私たちが想像する先住民のイメージとはだいぶ異なる（典型はむしろ手前に描かれた女性の姿であろう）。実際、彼らの生涯にかかわるデータや彼らの著作を詳しく見ると、私たちが思い込みで想像しがちな先住民イメージから程遠いことが多い。例えば、チマルパインは 15 歳でメキシコ市郊外のサン・アントニオ・デ・アバド教会に仕え、おそらくは人生のほとんどをこの場所で過ごした敬虔なキリスト教徒であった。彼がナワトル語で記述した宇宙像や世界地誌は、中世から大航海時代にかけてのヨーロッパ人からの借り物であった。また、イシュトリルショチトルは、テスココ王家の血は引くものの、テスココ貴族の中核にはおらず、直接的にはサン・フアン・テオティワカンのカシーケ家族に生まれたカスティソ（4 名の祖父母のうち 1 人だけが先住民）である。彼の弟バルトロメーは告解の手引書を著した在俗司祭で、スペイン人として一生を過ごしたようだし、イシュトリルショチトル自身の生活の基盤もメキシコ市内のスペイン人居住区にあったと考えられる。しかも、この一家は、ある訴

図 2『イシュトリルショチトル絵文書』のネサワルコヨトル像。本来はポマール『テスココ報告書』に添えられていた図と考えられる。（*Códice Ixtlilxóchitl*, f. 106r）

訟文書において、カシーケ領のあるサン・フアン・テオティワカンの住民から「あの家族はもはやスペイン人だ」などと評されている。

こういった「先住民」記録者たちが書き残した先スペイン期についての情報を利用する際、ある程度信用していい部分とそうではない部分を慎重に見極めながら読んでいく必要があるだろう。

3

ここでは、イシュトリルショチトルが記録文書の中で描き出したネサワルコヨトル（テスココ王在位 1431-1472）のイメージを取り上げてみたい。記録者イシュトリルショチトルは征服から半世紀以上経た 1578 年の生まれで、主に 17 世紀前半に複数の記録文書を執筆した。上述の通り、血の上ではカスティソであるが、記録文書の作者としては「インディオ」の立場を強調している。

図 2 は 16 世紀の絵文書のネサワルコヨトル像である。だが、この絵に表現されている戦士的なイメージとは異なり、現在、一般に広く流布しているネサワルコヨトル像は「詩人王」や「賢王」といったものである。現行のメキシコ 100 ペソ札のネサワルコヨトルはその典型の一つと言えるだろう。極めて写実的なネサワルコヨトルの肖像が中心に据えられ、その横に小さな文字で彼が詠んだとされる詩のスペイン語訳が印刷されている（図 3、図 4）。

図 3 現行のメキシコ 100 ペソ札に印刷されたネサワルコヨトルの肖像

©井上幸孝

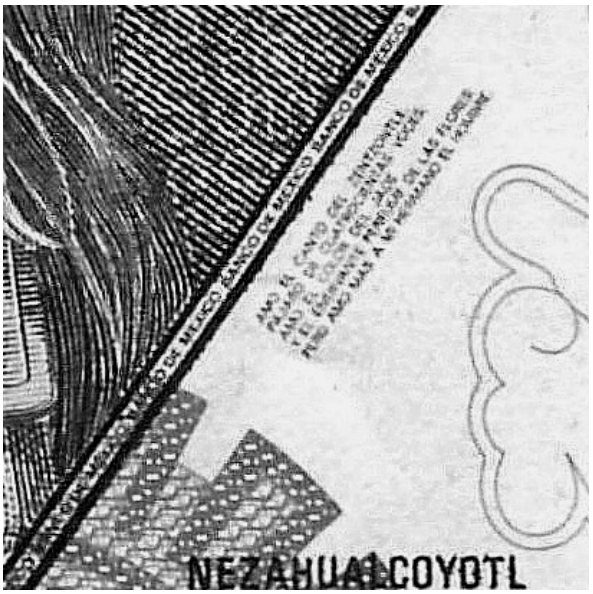

図 4 ネサワルコヨトル作とされる詩のスペイン語訳（図 3 の一部を拡大）

©井上幸孝

一般に流布しているネサワルコヨトル像のもう一つの例として、ウィキペディア（スペイン語版）の一節を引用してみよう。

> 「ひとたび王位を奪還すると、彼は科学・芸術・文学の分野でその知性を示すことになった。こうして、彼の広範な知的教養は高度な美学センスと自然への強い愛として表現され、それは、街の建築のみならず、詩的・哲学的表現にも反映された。アコルワ人がまだ多神教を信奉していた時代において、彼はトロケナワケの名で知られる唯一の神の存在

を提起する哲学を作り上げようとしたと何名かの歴史家が述べている。彼の詩の多くは、現在、メキシコ市の国立人類学歴史学博物館［ママ］に文書として残されている。」
（http://es.wikipedia.org/wiki/Nezahualcóyotl 2007 年 12 月 31 日参照、筆者による和訳）

ところが、こうした情報の多くの出所であるイシュトリルショチトルの各記録文書全体を丹念に読めば、すべての情報を鵜呑みにすることに疑問が生じる。彼の記録文書執筆の目的の一つは、先スペイン期先住民（とりわけテスココ先住民）の宗教性擁護であった。この目的のために、彼は歴代テスココ王がいかにキリスト教的規範から見て優れた人物だったかを強調しようとした。それを主張する上でイシュトリルショチトルが参照した「史料」の一つに、1580 年代にポマールが書き残した『テスココ報告書』のネサワルコヨトルに関する記述がある。「邪悪なメシーカ人」と「美徳あるテスココ人」を対比させようとしたポマールは、ネサワルコヨトルが唯一神信仰を見出しつつあったと述べた。この記述は、イシュトリルショチトルによって再利用され、一度はイエスの使徒による布教が実らなかったメソアメリカ先住民の間で、自発的な唯一神信仰への道が開かれつつあったという説（それゆえ、スペイン人到来後にすぐに改宗した先住民集団、とりわけテスココ人は宗教性に優れた人々であるという上述の主張につながる）が練り上げられた。つまり、上の引用文の唯一神の存在を見出したネサワルコヨトルというイメージは、ポマールとイシュトリルショチトルが同時代的意図に基づいて残した記述を現代人が字義通りに受け止めた結果と言える。おそらく、ネサワルコヨトルが優れた詩歌を残し、文化的営みに貢献した人物だったというのは事実であろう。しかし、彼の治世にはいくつもの征服活動が行われているし、テスココ湖の水質改善を目的とした大規模な土木事業も彼の指揮の下に行われている。換言すれば、現代の「詩人王ネサワルコヨトル」イメージとは、軍事的側面から文化的事象まで様々な功績を残したこの王の特定の側面だけを強調する「史料」の記述に左右されたものであろう。

無論、イシュトリルショチトルが書き残した情報をすべて虚偽と考えるべきではない。それどころか、その大半は先住民情報にアクセスし得た彼だからこそ入手できた情報であろう。例えば、彼は、ネサワルコヨトルやネサワルピリといったかつての王たちが実際には死んでおらずシコで生き続けているという先住民情報に言及している。高い確率で元の情報は実際に一部先住民が信じていた伝承であろう。その一方で、この情報に対して「ドン・セバスティアン王が現在も生きていていつか戻ってくると信じているポルトガル人のよう」で、「どうしてそのようなことが信じられようか」、「すべては嘘であり寓話である」という判断を著者イシュトリルショチトルは付け加えている。すなわち、情報を集めて記録文書に取り込む際、記録者がそれらを「解釈」していることも無視してはならない。

もしもネサワルコヨトルの場合のように様々な情報を解釈（＝情報操作）した記録者が他に存在したならば、後古典期後期メキシコ中央部の各王のイメージはずいぶんと違ったものになっていたであろう。アスカポツァルコのテソソモク王を称賛する記録者が仮に存在していたならば、現存するいくつかの文書が述べているような「暴君」ではなく、「偉大な王」ということになっていたかもしれない。別の記録者がメシーカ王モクテスマ 2 世（モテゥクソマ・ショコヨトル）の文化的側面を強く褒め称えていたならば、この王こそが「詩人王」として称えられることになっていたのかもしれない。

4

このような観点から史料の読み直しを考えていくと、再検討の必要な事項がいくつも思い当たる。例えば、「メシコ征服におけるモクテスマ 2 世が臆病者という言説はどのような史料の描写に基づいているのか」、「メシーカ人の分離からトラテロルコ創設に至るストーリーはテノチティトラン側の一方的な情報で再構成されてきたのではないか」といったテーマが即座に思い浮かぶ。アスカポツァルコ王マシュトラ、メシーカ王ティソシク（ティソク）、トラコパン王トトキワストリ（トトキワツィン）など多くの人物の歴史的役割もまだ十分に解明されておらず、そのためには慎重な史料分析が必要となろう。

「先住民記録文書」と呼ばれていることは、先スペイン期由来の「真正な」情報の「忠実な」転写であることと同義ではない。極論を言えば、このような単純な見方は、「スペイン人の記録した情報はすべて嘘」というのと大差ない。それゆえ、スペイン人が書き残した記録文書を読むのと同じ批判的な眼差しをもって先住民史料を読んでいくことが求められるだろう。

マヤ文明関係書物の紹介

多々良　穣（東北学院榴ケ岡高等学校教諭
東北学院大学教養学部非常勤講師）

昨年の４～８月に、マヤ文明関係の書物が６冊も出版された。日本において、これだけの短期間に一度に世に出されたのはこれまでなかったことである。東京の国立科学博物館を皮切りに７月から始まった「インカ・マヤ・アステカ展」関連で、NHK が中南米の古代文明の特集を組んだこともあり、一般の方もマヤ文明に対する関心を高めたことだろう。僭越ながら、今回出版されたマヤ文明関係の書物について、紹介も兼ねながら出版順に内容を簡潔に整理してみたい。

『アステカ・マヤ・インカ文明事典』　「知」のビジュアル百科 36　エリザベス・バケダーノ（原著）、川成　洋（監修）（あすなろ書房：2007.4.25）

このシリーズの百科事典は、科学・歴史・文化の三方向からわかりやすく解説し、基礎知識がすべて身につく、というのがキャッチフレーズである。われわれ研究者が知っている知識を、小学生高学年から中学生のレベルに合わせて整理している。初等教育向けの編集であり、写真や図版が豊富で見やすい利点はある。農耕や狩猟、家族の生活、飲食物など、文化的な側面も紹介されており、あまり一般的には知られていない病気や治療といったテーマも扱っている。これらの文明について初心者に興味を抱かせるという趣旨からすれば、一定の評価はできると思われる。

しかし問題なのは、書名にもなっているように「アステカ・マヤ・インカ」をまとめて紹介していることである。これらの文明の予備知識がある読者は、それぞれの相違点を意識して読むことは可能だが、初等教育向けの書物である以上、もっと違いを明確に編集するべきであろう。図書館の多くは本書を「児童書」に分類しているが、「古代アメリカ」はすべて一緒であってよいということにはならない。「メソアメリカの都市」と「アンデスの都市」という小タイトルはあるが、小見出しにそれぞれの文明の名称を載せた上で、各文明の特色を記述するなど、初歩的な知識であっても正確に理解できるような工夫がほしい。

『ようこそマヤ文明へ―マヤ文明へのやさしいアプローチ』　多々良穣　（新風舎：2007.6.15）

マヤ文明のイメージはミステリアスで神秘なものが強く、誤ったイメージを持っている人が多い。特に「水晶ドクロ」については、今年の某テレビ番組でマヤ文明を解説する際、冒頭で紹介しており、マス・メディアに対して憤りさえ感じる。普段からマヤ文明に対する高校生の誤解を感じており、中学生から大人まで、専門知識があまりない人たちでもマヤ文明を正しく理解できるよう書こうと考え、できあがった啓蒙的マヤ入門書である。本書の特徴は、エピソードもまじえて語りかける口調を再現した読みやすさ、質問形式の小見出しをつけて、読者がそれに自答する形で読み進めて行くことができる点だろう。読者が楽しみながら読み進め、正確な知識が得られるように工夫されている。

かつて中央アメリカに高度な文明を発達させたマヤ文明の宗教・風習・思想といった興味深い文化要素が紹介され、文明の成り立ち、社会制度、生活、そして古典期マヤ低地の崩壊といった基礎知識をわかりやすく概観している。そのなかでも、著者がこれまで研究してきた歯牙変工などの風習や王族の放血儀礼などの風習や精神文化について、比較的スペースを割いている。昨今関心が高まっているユネスコ世界遺産にも言及し、読者はよりマヤ文明が身近に感じられるようである。ただし、図や表が少なく、読者の理解を助けるためにはより的確な図版がもっと必要である。また、マヤ文明の基本知識には欠かせない暦と文字についての説明が不足している点、ここ近年の調査による新たな知見に乏しい点、そしてマヤと密接な関係があったテオティワカンについての記述がほとんどない点など、言及しなければいけなかった箇所も多い。

ちなみに、ここに記した文章は筆者にお寄せいただいた感想や批判も盛り込んで書いたものである。今後もご指導・ご鞭撻を賜りたい。

『NHK スペシャル 失われた文明マヤ』　恩田陸、NHK「失われた文明」プロジェクト（NHK 出版：2007.6.30）

基本的には三部構成となっており、恩田陸氏のエッセイ、NHK 番組ディレクターの梨本英央氏によるレポート、そして中村誠一氏によるティカル調査を中心とした報告が収められている。恩田氏のエッセイ「密林の中の白い道」は、知名度を生かしての営業的側面が強いと思われる。正直一般旅行者の感想とあまり変わりがなく、そこが親しみを感じさせる面もあるだろう。ただ、もう少しマヤ遺跡から何かを感じさせるような、彼女の色が濃くにじみ出るようなコメントが欲しい。写真は豊富で色彩も美しく、読者も十分楽しめる。

梨本氏の「密林が生んだ二千年の王国」は、これまで解明されてきたことの概説的要素が強い。おそらく読者が面白いと感じるのは、ティカルの水利用システムのところだろう。グレートプラザはわずかに傾斜があり、低い方には三つの貯水池がある。貯水池の底は石灰質のため、漆喰を

塗って雨水が貯まるように作られている。その三つの貯水池は上のものほどきれいな水で、一番下のものはもっとも汚れていたという。つまり水の再利用システムがあったとされている。ただ、この説明も含め、梨本氏のレポート内容は、NHK で放映された「失われた文明」と同じ内容であり、テレビも見た人はがっかりしたかもしれない。なお、「歯をギザギザに削るのはマヤ文明独特の風習」と書かれているが、マヤ以外のメソアメリカでも同様の風習があり、しかも起源はマヤではない。マヤ文明の特徴の一つではあるが、「独特」ではないことを申し添えたい。

中村氏の「ティカル発掘調査とマヤ文明の謎」では、今後北のアクロポリスが調査されれば、マヤ王朝の起源やテオティワカンの役割、中心部から離れた王墓の意味が解明されていくと述べられている。一般向けの概説的要素が強いが、なじみの薄いグループ６C－XVI の調査など、興味ある報告が載っている。

全体としては、読者に興味を湧かせる意図もあり、「失われた文明」というタイトル、「密林」や「謎」といったミステリアスなものを連想させる用語が目立つ。確かにマヤ文明はまだまだ解明されていないことが多いが、ミステリアスなイメージが先行する営業優先的な印象は否めない。

『マヤ文明を掘る―コパン王国の物語』　中村誠一（NHK 出版：2007.6.30）

著者は、現地に腰を据えてマヤ文明遺跡を調査した日本人のパイオニア的存在である。したがって個人的には、彼がコパン遺跡の調査を開始した経緯やその時の苦労話にもっとも興味が湧いたし、彼のこれまでの活動に対して敬意を表したい。

サブタイトルにもあるように、この本はコパン遺跡の調査で発見したこと、そこからどのように当時の社会が存在したのかを推測できるのかを楽しむことができる。著者が最初に現地で手がけたエル・プエンテ遺跡をはじめとするコパン周縁地域から、古典期後期にコパン王朝が衰退・崩壊していく様相を考察した部分に、彼のオリジナリティがよく表れている。

この本の目玉は、何といっても 10J-45 区域における王墓発見である。これまで圧倒的に発掘件数が多く注目されてきた遺跡中心部アクロポリスではなく、道路建設予定地から発見されることになった大型ヒスイ製品を伴った王墓は、まさに意外であり興奮を禁じ得ない大発見であった。副葬品として納められたものには、ヒスイ製の棒状胸飾りが２本含まれ、そのうちの１本には王権や統治権を示すゴザ模様が刻まれていた。石室の規模から見ても、ウミギク貝などの他の副葬品から見ても、中村氏は王墓だと断定している。彼は時期的に５～７代目の王が被葬者だと推測しているが、今後の調査によって特定される資料が出てくることが望まれる。

古典期マヤ文明が崩壊した理由は、著者の前作『マヤ文明はなぜ滅んだか？』（ニュートンプレス）に比べ、さらに詳細な資料によって語られている。ペテン地域を中心としたマヤ文明崩壊論だけではなく、コパン周縁地域において徐々に王権が衰退して行く様相は、かなり説得力のあるものとなっている。また、738 年に第 13 代コパン王がキリグアに捕らえられて斬首された事件が、地方首長の政治経済力が高まり離反していった契機となったという仮説も興味深い。

『マヤ・アステカ・インカ文化数学ミステリー―生贄と暦と記数法の謎 』　世界数学遺産ミステリー１　仲田紀夫（黎明書房：2007.7.7）

一応「マヤ」というタイトルがあるので紹介するが、マヤ・アステカ・インカに関連させて数学を楽しく話して聞かせるようなタイプの本である。仲田氏はこの著作以外にも、数学と関連させた書物を多く出版しており、数学教育においてはかなり著名な人物である。学問的に見るのでなければ単純に楽しめるかもしれないが、古代文明を数学的に考えるものとしては中途半端な印象を受ける。例えば、第４章の「アステカに伝わる不吉な予言」では、実際にアステカに関連する話題は数ページしかなく、残りはほとんど無関係な数学の話に終始している。古代文明における「数学ミステリー」と題するのはいかがなものかと思う。

本学会で取りあげるような書物ではないものの、「マヤ」に関して言えば、太陽の儀式、暦、そしてピラミッドと放棄について扱っている。しかし、生贄が胸を切り開かれるときの犠牲者が「助けを乞う眼」をしていたことから、無情さを表すために数字のゼロが「貝」ではなく「目」であったという、およそ科学的でない見解が示されている。また、都市の放棄では、52 年周期をマヤ人は神秘に感じ、自ら居住地を放棄して新しい土地へと向かったとし、以前流行った説が書かれている。数学ゲームを楽しむのは結構だが、学問的なマヤとかけ離れている話題を提供するのは問題だろう。

なお、ケチをつけるわけではないが、仲田氏の言う「マヤ数」はすべて二十進法として書かれているが、実際のマヤ暦はトゥン＝18 ウィナルで部分的に二十進法になっていないため、問の答えがマヤ暦とは矛盾している点を補足しておく。

『マヤ文字解読辞典』　マイケル D.コウ、マーク・ヴァン・ストーン（原著）、武井 摩利（訳）（創元社：2007.7.20）

コウは言わずと知れたマヤ学の大家であり、文字解読については『マヤ文字解読』（増田義郎監修・創元社：2003）もすでに出版されていた。『マヤ文字解読』は文字をどのように解読するかという本ではなく、これまでどのような人物が解読に携わり、どのような経過をたどって解読が進められてきたかに焦点を当てたものである。しかし、この『マヤ文字解読辞典』は、その書名が示すようにどのように解読するかのノウハウを記してある。しかもマヤ文字に精通していない人たちにも理解しやすい手引きである点が、特筆される。

本書は単なる「解読辞典」ではなく、文字を残した書記の役割、暦の種類や仕組み、儀礼活動、王の性格、そして多神教をはじめとする精神世界を概観することができる点で、読み物としても面白い。解読の手引きとしても、テキストを解読するための練習問題も組み込まれており、マヤ文字を自力で読んでみたいという読者の要求にも応えている。マヤ文字を解読する類の本として、八杉佳穂著の『マヤ文字を書いてみよう読んでみよう』（白水社）がある。同時に読むとさらに知識が深まるが、八杉氏の著書の場合は、本書と比べて言語学的要素が強く、どんな文字がどのようなものを表すかに重点が置かれている。文字解読によってマヤの社会システムが解明されたことを知りたい場合は、やはり本書を読むと楽しめるだろう。個人的には、第 11 章の「超自然世界」や第 12 章の「生物と無生物の世界」など、考古資料だけではわかり得ない精神文化に言及している箇所が興味深かった。

『古代メソアメリカ文明―マヤ・テオティワカン・アステカ』　青山和夫　（講談社選書メチエ：2007.8.10）

古代メソアメリカ全体の概説としての役割もさることながら、いわゆる「世界四大文明」という記述に問題があることを提起し、アメリカ大陸の文明との違いも表にしてわかりやすく解説している点が、従来の古代アメリカを扱ってきた書物との相違を際立たせている。当然専門用語も多く使用されているが、特に高校生には古代アメリカ文明の特質を理解させる上で有用である。ただ、欲を言えば、農耕を中心とした食料獲得経済へ長年に亘って移行した点だけでなく、鉄器が存在しない点で「新石器革命」が起こらなかったことに触れると、より明確に読者に古代アメリカの特質が伝わると思われる。

本書ではマヤ文明だけではなく、オルメカ文明やサポテカ文明、マヤに大きな影響を与えたテオティワカン文明やトルテカ文明、そしてアステカ王国など、タイトル通り「メソアメリカ文明」を網羅した概説書である。著者は 10 年前に『メソアメリカの考古学』（同成社）を共著で出版しているが、それに比べると単に専門用語を並べるのではなく、平易な文章で読みやすさが格段に進歩しているように思える。また、アステカ「帝国」ではなく「王国」と記しているのをはじめ、修正点や新たな知見も見られる。ただし、第３章で多用している「ニューヨーク」、「ポンペイ」、「パリ」といった表現を遺跡に当てはめている点が気にかかる。この表現は著者自身のものではないようだが、古代アメリカ世界は独自に発展したものであり、欧米の有名なものをネーミングに持ってくるのは、やや違和感がある。読者にはわかりやすい例えかもしれないが、欧米的発想ではないだろうか。

全体としては、「選書メチエ」のレベルとしては非常に読みやすい内容となっており、一般人に対してもかなり価値の高い概説書であろう。ただ欲を言えば、第５章のテオティワカン文明はマヤ文明に多大な影響を及ぼしており、紙面上の制約はあるだろうが、個人的には両者の類似点を具体的に述べてほしかった。

最後に、マヤ文明のイメージが、相変わらずミステリアスなもので一般的に受け入れられていることを記しておきたい。筆者は、2008 年１月に催される仙台市地底の森ミュージアムの「考古学講座」の講演依頼を受けたが、発表仮題が「神秘の遺跡―マヤ文明」であった。これはまだまだマヤ文明に対するロマンあふれたイメージが消費・生産されていることを示す典型的な例であり、我々マヤ学研究者はそれを少なからず修正していく使命を負っていると言えるだろう。学問としての歴史学は史実を明らかにすることであり、その点は調査・分析がかなり進められていることで大きな役割を果たしている。しかし、その史実を多くの人々に還元しなければ、我々が研究してきた、そしてこれから研究していくことはさほど大きな意味をなさないのではないかと思われる。

『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』第 11 号（2008 年 12 月発行予定）に掲載する原稿を募集します。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから（原稿受領後１～２ヵ月で査読終了予定）順次掲載する予定です。

投稿希望者は、編集委員会（右記佐藤宛）にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より、「投稿カード」を配布致しますので、これを提出原稿に添付してください。

なお、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

【投稿に関する連絡先】
佐藤悦夫
〒930-1292　富山市東黒牧 65－1
富山国際大学国際教養学部
Tel：[redacted]、Fax：[redacted]
E-mail：[redacted]

役員会報告

2007 年度第 1 回役員会議事抄録

開催日時：2007 年 12 月 7 日（金）17:00 －20：30
開催場所：国立民族学博物館　4 階　第 1 演習室
出 席 者：大貫良夫、関雄二、大平秀一、伊藤伸幸、寺崎秀一郎、鶴見英成、山本睦、荒田恵
委任状提出者：坂井正人、佐藤悦夫
議　長：関雄二
書　記：山本睦、荒田恵

定足数の確認

関代表幹事により、出席者と委任状提出者を併せて過半数を超えており、役員会の成立が確認された。

1．前回役員会議事録の確認

関代表幹事により、2006 年 12 月 2 日に開催された第 5 期役員会および第 5・6 期合同役員会議事録の確認がなされた。

2．2006 年度各委員会事業報告

■会誌編集・発行

佐藤委員の代理で、山本事務幹事より、2006 年 12 月に会誌第 9 号を発行した旨が報告された。さらに、編集（校正）時におけるアルバイト料の発生（1 人 5,000 円×2）、発送方法（国内在住会員：メール便、海外在住会員：郵送）に関しても報告がなされた。会費納入会員の権利侵害を考慮し、2 年以上の会費滞納者への会誌発送を見合わせることが、2007 年 1 月 15 日に役員のメーリングリスト上で了承されたことを再確認した。

■会報編集・発行

大平委員により、2007 年 1 月に会報第 21 号、2007 年 7 月に会報第 22 号を編集・発行した旨が報告された。

■研究大会

山本事務幹事により、2006 年 12 月 2 日に早稲田大学で開催した研究大会に、会員 51 名、一般参加者 20 名が参加したこと、早稲田大学より研究大会補助費を受けたことが報告された。

■広報（HP）

伊藤委員より、HP トップページのデザイン変更、それに伴うアルバイト料の発生、サーバー使用料の支払いに関して報告された。HP デザインに関する若干の意見が出され、今後の改善点として検討することが合意された。

■会員名簿作成

山本事務幹事より、2007 年 3 月 14 日付で、会員全員に会員情報フォームを発送し、名簿を作成したことが報告された。各会員の許諾を得た情報項目のみ名簿に掲載し、情報フォームを返送しなかった会員については氏名と関心分野のみを記載したこと、情報フォームの返送率の低さに関しても併せて報告がなされた。

以上の報告・審議を経て、2006 年度事業報告が承認された。

3．2006 年度決算報告並びに監査報告

荒田委員より、2006 年度決算が報告された。また鶴見監査委員より、2007 年 11 月 23 日に国立民族学博物館で会計監査を行った旨、報告された。2006 年度研究大会で、一般参加者 1 名の当日資料代（500 円）の領収書を発行した形跡がなく、会計委員の書面による経緯説明で了解し、監査を完了したことが報告された。

関雄二代表幹事より、会費徴収率の低さについて説明がなされ、滞納会費の徴収を継続している旨が報告された。

2007 年度の会誌印刷・製本費引当金を含んでいるとはいえ、繰越金の多さを指摘する声もあったが、会費滞納会員が多い状況を考慮し、予備費を確保することで合意した。

以上の報告・審議を経て、2006 年度会計決算報告が承認された。

4. 2007 年度事業計画案ならびに予算案

■会誌編集・発行

佐藤委員の代理で、山本事務幹事より、『古代アメリカ』第 10 号を発行することが報告され、了承された。第 11 号より、試験的に、版下作成作業を外部委託することが提案され、了承された。また 2007 年 4 月 12 日に、メーリングリスト上の役員会で、欧文投稿の受理を了承されたことが再確認された。

■会報編集・発行

大平委員より、2008 年 1 月と 8 月にそれぞれ会報 23 号・24 号を編集・発行することが報告され、了承された。

■研究大会

山本事務幹事より、2007 年 12 月 8 日に第 12 会研究大会を国立民族学博物館で開催することが報告され、了承された。また非会員の大会参加費を 500 円とする案が提示され、承認された。大会開催に際し、国立民族学博物館への協力名義を申請して受理されたこと、ならびに同博物館より研究大会ポスター、チラシ作成費の補助を受けたことも併せて報告された。

■広報（HP）

伊藤委員より、昨年度と同様、HP を管理・維持していくことが報告され、了承された。関代表幹事より、当学会のロゴの作成が提案され、今後の検討していくことで合意した。

■会員名簿作成

山本事務幹事より、昨年度と同様に会員名簿を作成することが報告され、これが承認された。会員情報フォームについては、郵送に加えて、電子メールの活用を推進していくことも報告され、了承された。なお、名簿の発送は信書で郵送することが合意された。

■予算案

荒田委員より、2007 年度予算案が提示され、以下の 2 点について審議・了承した後に原案を修正することで合意し、「会計報告」に示したような予算案が了承された。

・研究大会前日における役員会開催に際し、一律 7,000 円の宿泊費補助の確保。

・選挙管理委員の出張旅費の確保。

■役員選挙

山本事務幹事より、3 月初旬に役員会で選挙管理委員 4 名を選出して選挙管理委員会を開催し、3 月中旬に名簿・選挙期間・開票日の公示を行い、6 月末までの 2 週間を選挙期間として 7 月に開票する案が提示され、承認された。最終的な日程調整も含め、詳細決定は、選挙管理委員会に委ねることが確認された。

5. 会員について

山本事務幹事より、新入会員、退会者、会費滞納会員および連絡先不明会員について報告が行われ、了承された。また、2 名の除名処分が審議され、承認された。また現在、除名該当会員が 4 名おり、役員会が再度連絡を試みることを条件に総会で諮ることが承認された。

6. 次期研究大会開催校について

関代表幹事より、2008 年 12 月 2 日に、2008 年度研究大会を早稲田大学で開催することが報告され、了承された。

7. その他

山本事務幹事より、2007 年 6 月、当学会が日本学術会議の協力学術研究団体として指定されたこと、日本学術会議が HP へのリンクを了承していることが報告された。また、電子メールで、日本学術会議より当学会事務局宛てに送られてくる人文科学系の情報の内、必要と判断されるものを適宜 HP に掲載することで合意した。

（役員会議事録の要点を抄録）

第 12 回総会報告

第 12 回総会議事抄録

開催日時：2007 年 12 月 8 日（土）16：55－17：55
開催場所：国立民族学博物館　4 階　第 5 セミナー室
議　　長：井口欣也（埼玉大学）
書　　記：山本睦、荒田恵（総合研究大学院大学）

1.　定足数の確認（代表幹事　関雄二）

出席者 36 名、委任状提出者 66 名、計 102 名となり、会則第 19 条に記された会員数（174 名）の過半数という条件を満たしているため、総会が成立する。

2. 議長並びに議事録署名人の選出（代表幹事　関雄二）

立候補がなかったため、役員会が井口欣也会員(埼玉大学)を議長に推薦し、会員の承認を経て、同氏が選出された。また、議事録署名人には澤村慎也会員（名古屋大学博士課程後期課程）および徳江佐和子会員（明治学院大学）が選出・承認された。

3. 2006 年度事業報告

役員会で承認された、会誌『古代アメリカ』第 9 号の発行、会報 21・22 号の発行、第 11 回研究大会・総会の開催、第 12 回大会の準備、ホームページの維持・更新、名簿作成に関して報告され、会員からの承認を得た。

なお、青山和夫会員より、学会が最も尽力すべきは会誌であるという共通認識をふまえて、会誌の充実を図るために、以下の意見・要望が述べられ、それに対する編集委員の回答がなされた。

①　会誌編集委員による投稿依頼

寄稿を待っているだけではなく、編集員自ら投稿者を促す必要があるのではないか。

【回答】現在、編集委員みずから各会員に原稿投稿を依頼している。

②　調査速報

調査速報とは英語でいう“report”、つまり研究ノートであるため、本人あるいは学会誌の質を保持するために査読があった方が良い。

【回答】役員会で検討議題とする。

③　会員の活動状況

毎年、研究大会において調査速報が報告されており、各会員の活動状況が把握できる状態にある。そのため、各年度の会員の調査状況についても、編集委員より各会員に投稿を促す必要があるのではないか。

【回答】現在、編集委員みずから各会員に原稿投稿を依頼している。

④　原稿の校正

今回、会員に配布された会誌 10 号に掲載された論文で使用した表の項目および値の記載位置がずれていた。会誌の質を保持するためにも、執筆者に初校などの版下を送って、校正を依頼する必要があるのではないか。

【回答】Word ファイルで執筆者に原稿を送って校正を依頼しているうえ、編集委員も 3 回の校正を行っている。執筆者に版下を送って構成を依頼する場合、原稿の締め切り時期を早めなければならないなど、会誌の編集作業日程を組みなおす必要がある。

4. 2006 年度会計報告

（1）2006 年度会計報告（会計委員　荒田恵）

「会計報告」に示したとおり、2006 年度会計の決算報告がなされた。

（2）2006 年度監査報告（監査委員　鶴見英成）

坂井正人、鶴見英成委員が監査を行い、会計報告の正しさを確認したことが報告された。

議長によって、2006 年度会計報告について承認の確認が行われ、会員の承認を得た。

5. 2007 年度事業計画案ならびに予算案（代表幹事　関雄二、会計委員　荒田恵）

■2007 年度事業計画案（代表幹事　関雄二）

役員会で承認された、会誌『古代アメリカ』第 10 号の発行、第 11 号の編集準備、会報 23・24 号の発行、第 12 回研究大会・総会の開催、ホームページの維持・更新、名簿作成、役員選挙に関して報告され、会員からの承認を得た。

なお、渡部森哉会誌編集委員より、会員全員にメールにて原稿依頼を行うために、会員間のメーリングリスト作成に関する要望が出され、関代表幹事より、作成を試みるという回答がなされた。これに対し、加藤泰建会員より、メーリングリストの使用を役員会に限定し、会長および代表幹事などの承認を得るなどチェック体制を講じるべきという意見が出された。関雄二代表幹事より、この件を了承した旨が伝えられた。

■予算案（会計委員　荒田恵）

「会計報告」に示したとおり、2007 年度予算案が提示され、会員の承認を得た。

なお、横山玲子会員より予備費の計上金額の多さが指摘された。これに対して、関雄二代表幹事より、会費未納分を考慮すると、今後の学会運営を円滑に行うためにも、予備費の計上金額は妥当であるという回答がなされた。また横山会員からは、旅費の上限の有無についても質問が出され、宿泊費として一律 7000 円支給することを役員会にて決定したことが回答された。

この他、加藤泰建会員より会費滞納会員の多さが指摘され、関雄二代表幹事が、会費滞納会員に役員が分担して連絡・督促する旨、回答した。

6. 会員状況報告（事務幹事　山本睦）

2007 年 12 月 7 日現在の会員数は 174 名で、新入会員が 9 名、退会者が 2 名であったことが報告された。

7. その他（代表幹事　関雄二、事務幹事　山本睦）

日本学術会議の協力学術研究団体への認定、欧文による

会誌への投稿が可能となったこと、会員名簿の作成と発送方法、会員の除名に関する報告がなされ、承認された。

渡部森哉編集委員より、外国語での投稿規程を整備してほしいといの要望が出され、また外国語を母国語とする者を査読者とすることの妥当性について質問があった。加藤泰建会員より、当該外国語を母国語とする研究者に限定して査読を依頼することは不適切であるとの意見が出され、投稿規定を含め、編集に関する業務は編集委員に一任されているはずであるという意見が述べられた。また関代表幹事より、会則では、会員以外でも査読が認められている点を確認した上で、外国語で投稿された場合の査読者、投稿規定については、編集委員を含む役員会での検討議題とすることが伝えられた。

また、杉山三郎会員より、学会の充実を図るために考古学以外の分野の研究者の入会を促進する方法を考えてはどうかという意見が出された。これに対して、関代表幹事より、学会としてはたらきかけるというよりも、個々の会員が研究を通じてネットワークを広げ、入会を募ることが必要であるとの意見が出された。大貫良夫会長より、本学会発足時はアメリカの先史文化に興味・関心を持っている人を中心に会を運営するという意図があったはずであり、多分野ならば誰でも、というよりも、本学会の趣旨に賛同していただける範囲内での入会を推進すべきであるとの意見が寄せられた。

さらに青山和夫会員より、昨年度の総会で検討課題となっていた、世界史の教科書における古代アメリカ史の記述増加に関して、その検討状況が問われた。これに対し、関代表幹事は、前年度に実質的な検討を行っていない点を陳謝し、今後、日本学術会議からの情報など得ながら、改めて役員会の検討議案とすると回答した。これに対し、加藤泰建会員より、教科書問題は、学会の活動だけで片づくものではなく、教育行政を含む、複雑な対応が必要であるとの指摘があった。

8. 会長挨拶（会長　大貫良夫）

昨年度、中米の先史文化関連書物が 6 冊も出版されており、テレビ等でもアメリカの先史文化が取り上げられ、注目を集めつつある。一方、マスコミで報道される内容は薄く、われわれはこの問題に取り組んでいく必要があるとの提言がなされた。

議長の井口欣也会員によって閉会の辞が述べられ、拍手をもって総会を終了した。

（総会議事録の要点を抄録）

第 12 回研究大会

2007 年 12 月 8 日、国立民族学博物館で開催された第 12 回研究大会の発表者と発表題目は以下の通りです。

調査速報の部

(1) 「ペルー北部インガタンボ遺跡発掘調査報告」
山本睦（総合研究大学院大学博士課程/日本学術振興会特別研究員 DC2）

(2)「ペルー、パコパンパ遺跡出土遺物の分析概報：石器・骨角器・土製品・金属器」
荒田恵（総合研究大学院大学博士課程）

(3) 「パコパンパ遺跡出土動物骨の分析」
鵜澤和宏（東亜大学）

(4) 「パコパンパ遺跡半地下式広場の封印過程」
関雄二（国立民族学博物館）、フアン・パブロ・ビジャヌエバ（国立サン・マルコス大学）、ワルテル・トッソ（ペルー財団法人天野博物館）、アラセリ・エスピノサ（国立サン・マルコス大学）、井口欣也（埼玉大学）、坂井正人（山形大学）

(5) 「ペルー北部高地、パレドネス遺跡出土遺物の分析」
渡部森哉（南山大学）

(6) 「アステカ・テノチティトラン主神殿出土のトルコ石の象徴性」
井関睦美（慶應義塾大学）

(7)「ホンジュラス、ロス・ナランホス遺跡調査 2004-2006」
伊藤伸幸（名古屋大学）

(8) 「マヤ文明の政治経済組織と石器研究」
青山和夫（茨城大学）

研究発表の部

(9)「米国南西部のココペリと呼ばれる人物図像について」
澤村慎也（名古屋大学博士課程）

(10) 「中央アンデス高地におけるラクダ科動物家畜の飼育と利用：民族考古学的アプローチによる考察」
若林大我（東京大学博士課程）

(11) 「ワルパ、ワリ、チャンカの無文土器」
土井正樹（国立民族学博物館外来研究員）

(12) 「形成期におけるネペーニャの戦略と地域間関係」
芝田幸一郎（法政大学）

(13) 「アンデス形成期社会におけるクントゥル・ワシ神殿」
加藤泰建（埼玉大学）

会計報告

（1）2006 年度決算報告（2006 年 10 月 1 日～2007 年 9 月 30 日）

[redacted]

[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	

[redacted]

[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	

[redacted]			[redacted]

[redacted]		[redacted]
[redacted]		
[redacted]		
[redacted]		[redacted]

（2）2007 年度予算案［2007 年 10 月 1 日－2008 年 9 月 30 日］

[redacted]

[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]
[redacted]		[redacted]
[redacted]		[redacted]
[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	

[redacted]

[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]
[redacted]		[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	

[redacted]

2007 年 5 月 21 日から 2008 年 1 月 10 日までの役員会（メールを含む）で以下の方々の入会が承認されました。会員数は現在 176 名となっております。

・[redacted]
・[redacted]

事務局からのお知らせ

１．会費納入のお願い

2007 年度までの会費が未納となっている方は、同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2006 年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌の発送を見合わせております。

２．会報への投稿募集

『会報』第 24 号への原稿を募集します。研究随想、研究ノート、フィールドワーク便りなどテーマは自由で、字数は 2000～3000 字程度です。締め切りは、5 月末日と 11 月末日の年 2 回となります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

３．会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2000 円で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

４．以下の会員の方々の転居先、及びメールアドレスが不明となっております。メールアドレスは、今後、事務連絡に使用させていただく場合がございます。転居先、または変更後のメールアドレスをご存じの方は、事務局(jssaa@sa.rwx.jp)までお知らせ下さい。

[redacted]

[redacted]

[redacted]

次回研究大会について

2007 年 12 月に開催された第 12 回総会において、2007 年度事業報告の中で、次回の研究大会・総会の開催場所と日程の報告が漏れておりました。

第 13 回研究大会は、2008 年 12 月 2 日に、早稲田大学で開催する予定です。詳細につきましては、2008 年 7 月に発行いたします会報 24 号ならびにホームページ上でお知らせいたします。役員会ならびに事務局の不手際で、報告が漏れてしまいましたことを反省いたしますとともに、会員の皆様に深くお詫び申し上げます。

（代表幹事：関雄二）

役員選挙のお知らせ

現在の第 6 期役員は、2008 年 9 月 30 日で任期が終了いたします。「役員会報告」でも述べられているように、本年度は、次期会長および代表幹事を選出するための選挙が実施されます。これに伴い、2008 年 3 月初旬頃に、現在の役員会で選挙管理委員 4 名を選出し、選挙管理委員会が開催されます。最終的な日程は選挙管理委員会で定められますが、3 月中旬頃に選挙名簿・選挙期間・開票日の公示を行い、その後 6 月中旬頃～6 月末頃までの 2 週間程度を選挙期間として会員の皆様から投票いただき、7 月頃の開票を予定いたしております。

これまでの役員選挙の投票率は、極めて低い状況にあります。学会の運営に支障が出ないためにも、一人でも多くの会員に投票いただきたく存じます。ご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

＜編集後記＞

新しい年を迎えました。会員の皆様がさらなる躍進を果たされる年となりますよう、お祈り申し上げます。新年早々より、本学会にとっても喜ばしいお知らせを受けました。青山和夫会員（茨城大学）が、「古典期マヤ人の日常生活と政治組織の研究」と題した研究で、日本学術振興会賞を受賞されました。おめでとうございます。

今号には、多々良穣会員からご投稿いただきました。また、井上幸孝会員には執筆を依頼し、快くお引き受けいただきました。本会報の編集にご協力賜わったすべての皆様に、深く御礼申し上げます。

2008 年 2 月　大平秀一

＜表紙写真提供：大平秀一＞

発行　古代アメリカ学会
発行日　2008 年 2 月 1 日
編集　大平秀一、山本睦、荒田恵
古代アメリカ学会事務局
〒565－8511 大阪府吹田市千里万博公園 10－1
国立民族学博物館 [redacted]
電話：[redacted]
Fax：[redacted]
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180－1－358812
ホームページ URL　http://jssaa.rwx.jp/